

KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2025年度 第3号

事務局：〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

大阪教育大学 多文化教育系 篠崎文哉研究室内

E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: <http://www.keles.jp/>

2026年1月30日発行



第29回卒論・修論研究発表セミナー 参加のご案内

2026年2月8日(日) 大阪教育大学 天王寺キャンパス

日時：2026年2月8日(日) 9:00～15:00(予定)

会場：大阪教育大学 天王寺キャンパス

参加費：無料

内容：学部学生による卒業論文・大学院生による修士論文、教職大学院生の実践課題研究報告書・修了論文の研究発表

今年も、学生・院生の皆さんに英語教育に関する様々なテーマでご発表いただきます。将来の英語教育について実践者・研究者と一緒に考えるための語

らいの場とするためにも、先生方に励ましの言葉をかけていただけましたらありがたく存じます。

当日はスペシャル・トーク講師に廣森友人先生(明治大学)をお迎えして、ご講演いただきます。

多くの方にお越しいただき、実り多きセミナーになればと思っております。ご参加、心よりお待ちしております。事前参加申し込みやセミナーの詳細は、[KELES ウェブサイト](http://www.keles.jp/)をご覧ください。

報告 関西英語教育学会 第64回 KELES セミナー

開催日：2025年11月3日(月・祝) オンライン開催

第64回 KELES セミナーは、「英語で育てる心と視野—子どもたちのグローバルマインドと人間力を育む授業—」をテーマとして、賢明学院小学校の中村直紀先生、桜花学園大学の柳田綾先生、名古屋大学の鈴木駿吾先生にご登壇いただきました。

3人の先生方から、授業における指導をコミュニケーション能力の育成だけに留めず、英語教育を通してどのような生徒を育てるかを多角的に考え直すことができたセミナーでした。お申込み・ご参加いただいた73名の皆様に心から感謝申し上げます。

講演1

「今後グローバル社会で子ども達に求められる能力を育む授業実践～小学校編～」

講師：中村 直紀先生(賢明学院小学校)

11月3日に開催された KELES セミナーでは、賢明学院小学校の中村直紀先生による講演「今後グローバル社会で子ども達に求められる能力を育む授業実践～小学校編～」を拝聴した。中村先生は、これまで幅広い年齢層の学習者に英語を教えてこられた経験と賢明学院小学校での実践をもとに、学びに向かう姿勢を育てる授業づくりの在り方を語られた。

まず印象的であったのは、「わくわくする情報を共有しよう」というメッセージである。子どもの興味関心を引き出すには、驚きや発見のある話題を提供し、それを学習内容と結びつけることが重要だと述べられた。児童が「世界ってすごい!」「自分も英語を使って世界で活躍したいな!」とを感じるような身近な話題を共有することが、英語学習のモチベーションになるという考えに共感した。英語を使用

する目的や場面が鮮明にイメージできると児童の意欲が高まると感じた。

次に、授業を積極的に公開し、他者からの視点を取り入れる姿勢が紹介された。授業公開は単なる発表の場ではなく、他の教師との対話を通して自身の授業を客観的に捉え、改善していく契機になるという。子どもにとっても、他者に見られることがよい刺激となり、学びに対する意欲を高める契機になるという指摘が印象深かった。

さらに、経験談や失敗談をオープンに語ることの大切さも強調された。教師が自らの失敗を隠さず共有することで、児童は「失敗してもいい」「挑戦することに意味がある」と感じ、安心して学ぶ姿勢をもてるようになる。中村先生の言葉からは、教師自身が子どもたちの学びのモデルであるという自覚が伝わってきた。

また、英語学習は「永遠のループ」であるとの指摘があった。児童にその場で100%の理解を求めるよりも、今後の学習や生活に生かす「学び方」や「学びへの向き合い方」を指導することが重要である。小学校段階でその基礎を身につけることが、中学校・高校以降の自律的な学習につながるという視点は、長期的な見通しのもとに立っており、「生きる力の育成」と近いものがあると感じた。

講演後半では、英語教育デザインの具体的なポイントが紹介された。児童と教師の発話量の比率は「児童8：教師2」を意識されており、授業中に児童が自分の言葉ではなす時間を十分に確保することが大切だとされた。間違いを恐れず発話できる環境づくりや、実際の場面を想定した活動の設定、毎時間の授業パターンの一貫性が、安心して取り組む土台になるという。また、単語や文法の理解は「対話の中で」促すこと、英語の大切さや学ぶ意義を児童に実感させることも強調された。特に、音声を重視し「頭の中に英語の音が残るような学び」を意識するという視点は、「話すこと」「聞くこと」から始まる小学校段階の英語教育において非常に有効であると感じた。

中村先生は最後に、「教師自身が学びつづける姿を見せることこそが、児童への最大のメッセージである」と語られた。教師が常に探究的な姿勢をもち、他教科との連携や授業デザインのアップデートを行うことが、児童にとっての学びのモデルになるという言葉に強く共感した。

本講演を通じて、英語教育における「主体的に学ぶ子どもを育てる」という目標は、教員の在り方と不可分であることを改めて実感した。児童が「英語って面白い」「もっと話したい」と思える授業を設計するためには、教師自身が学び手として挑戦し続ける必要がある。今後は、授業の中で児童が主体的に考え、伝え合う時間をさらに増やすとともに、自らも授業を客観的に振り返り、改善を重ねていきたい。

報告者：中村 陸人（浜松市立気賀小学校）

講演2

「いつもの授業で心を育てる

—実践から見えた原則とヒント—

講師：柳田 綾先生（桜花学園大学）

鈴木 駿吾先生（名古屋大学）

近年、外国語教育ではAI技術の急速な発展への反動として、「人間らしさ」への関心が高まっている。そのような時代状況の中で、ヒューマニスティック言語教育（Humanistic Language Teaching: HLT）の再評価が進んでいる。本講演では、柳田綾先生と鈴木駿吾先生から、HLTの理念、理論的背景、そして実践例について報告があった。

まず柳田先生から、HLTの概要と歴史的背景が説明された。HLTは学習者を全人格的存在として尊重し、潜在的可能性の発揮を支援することを目的とする教育理念に基づく。安心できる教室風土の中で自己肯定感を高め、学習者にとって真に意味あるコミュニケーションを促す活動を重視する点に特徴がある。1960年代の人間性心理学を基盤とし、70～80年代にはコミュニティ・ランゲージ・ラーニング、サイレント・ウェイなどの教授法として登場した。しかし、その後の第二言語習得（SLA）研究の隆盛に伴い、HLT研究は一時下火となった。近年のAI技術の急速な普及を背景に、改めて「人間らしい学び」への関心が応用言語学や外国語教育の分野で再び高まっているという。

続いて鈴木先生は、外国語教授法およびSLAの観点からHLTを位置づけられた。HLTは言語知識の伝達よりも、言語使用を通じた自己理解・他者理解・関係形成を重視するアプローチに立つ。これは「インタラクション仮説」や「やりとりの力」と高い親和性をもつとされる。また、内容重視型教育

(CBI) との共通点も指摘された。HLT には特定の活動形式がなく、教材を問わず実践できるため、教授法として自由度が高い。その分、教師には目的に応じて自ら判断しながら活動を設計し、教育的に意味のあるやりとりを生み出す省察的・自律的な姿勢が求められるとされた。

さらに鈴木先生は、「個人差要因」にも言及された。近年は特に非認知的能力、社会情緒的側面の重要性が強調されており、これは HLT の目指す「自己理解」、「関係性の構築」と深く関わる。教師は学習者の持つ要因のうち、変容しにくい特性は受容しつつ、変容の可能性のある要因を見極めながら、より良い方向に伸ばしていく支援が重要である。例えば、学習者が不安感情をもつことを抑えるのは難しいが、楽しさや達成感といった肯定的感情を引き出す工夫はでき、それが学習にとって効果的であると述べられた。CBI の知見や学習者の自己関与性、全人的教育目標、教師の役割といった複数の観点から言語習得と人間的成長の統合的理解が進むことで HLT が今後体系化されていくとまとめられた。

後半では、柳田先生が HLT の実践例を紹介された。短い英語で自分を表す「五行詩」は自己理解と自己肯定感の向上を促す活動である。“If You Were

a Hero”や“A friend is someone who...”といった活動は、他者理解や肯定的な人間関係の形成を助ける。「未来名刺」の活動は理想自己を可視化し、自己実現への意欲を高めることを目的とする。

最後に、先生方は「どのような人間を育てたいのか」という教師自身の批判的省察の継続と、さらなる研究の必要性を課題として示した上で、HLT 実践に向けて以下のことを述べられた。教科書の題材を「Humanistic な角度」から捉え直し、学習者にとって意味のある活動へと再編成するとともに、その中で言語機能や形式が自然に繰り返し使われるよう工夫していきたい。省察的に学習者と授業を共同構築する意識を持ちながら、言語使用者として全人的に育ていくことが教師に求められる。

柳田先生は、HLT の実践として「未来名刺」に取り組んだ生徒が、卒業後に実際にその夢を叶えたと知らせてくれたというエピソードを紹介された。このようなことがまさに私たちが教師でよかったと思える瞬間なのだと共感できた。本講演は、言語教育の本質を「人を育てる営み」として捉え直す契機となり、私自身の授業実践を振り返る貴重な機会となった。

報告者：山本 享史（天理大学）

報告 関西英語教育学会 第 65 回 KELES セミナー

開催日：2025 年 12 月 20 日（土） 会場：関西大学梅田キャンパス

第 65 回 KELES セミナーは、「**確かな学力伸長のための中高接続**」をテーマとして、神戸大学附属中等教育学校の増見敦先生、東京学芸大学の臼倉美里先生にご講演いただきました。英語の授業を通した生徒の探究的な学びのあり方や中高の接続を視野に入れた中学英語の定着について考えることができた大変有意義なセミナーでした。お申し込み・ご参加いただいた 46 名の皆様に心から感謝申し上げます。

講演 1

「『生徒自身の英語』を育てる授業デザインーパフォーマンス課題を核に、探究的学びと小・中・高接続を背景にして」

講師：増見 敦先生
(神戸大学附属中等教育学校)

本講演では、増見敦先生に中高の連携や神戸大学附属中等教育学校における実践例を踏まえて、探究的学びの在り方について、ご講演いただいた。

講演の冒頭では、まず神戸大学附属中等教育学校における英語教育の理念・目標「生徒自身の英語(生徒それぞれの個性が宿った英語力)を育むこと」について概観した。同校では創設以来、探究的学びとパフォーマンス課題・評価を軸とした単元構成・英語授業づくりを重視してきた。

教育現場では、英語科に限らず、道徳や総合的な学習、さらには学校全体の教育活動と連動して「深い学び」を促すことが求められている。しかし、理想と現実の間には大きなギャップがあり、英語の授業でどのように探究活動を進めていくかが大きな課題である。

増見先生は、英語による探究活動をより意味のあるものとするために、次の3点を強調された。

1. **探究サイクルを構築すること**：「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の学習プロセスの中で、「学校全体が問いを立て、考え続ける学び」を肯定する文化を促進する。

2. **その時々に必要な語句や表現を教師が英語でモデルとして示すこと**：パフォーマンス課題に必要な知識・技能を示す際に教師がモデルを示すことで、生徒は安心して探究学習に取り組むことができる。

3. **生徒任せにしないこと**：生徒任せになると間違った語句や意味の伝わらない表現や文が散見し、十分な学習効果が得られにくくなる。

また、増見先生はパフォーマンス課題・評価に関して、「入試の壁」「指導者・指導観の壁」「生徒・学習観の壁」「探究型の壁」という4つの障壁があり、学校関係者の実感として、その壁は非常に高いものであることにも言及された。これらの壁を乗り越えるためには、生徒のパフォーマンスを評価することを念頭に置いた授業を日々設計していくことが大切である。

後半では、写真や映像などを通じて、神戸大学附属中等教育学校における多様な実践例が紹介された。その中でも特に校種接続に関連する実践活動をいくつか紹介する。

1. **論文の執筆**：高校3年生になると、生徒は卒業論文として、18,000字程度の論文を執筆する。専門性・独創性の高いテーマに取り組む生徒も見られた。

2. **協同ゼミ**：生徒が各自で1テーマを設定し、4学年で協同ゼミを開催する。お互いのテーマに対してアドバイスや質問を行い、相互理解と尊重を深める学びが行われていた。

3. **大学の発表会で発表**：生徒は神戸大学における発表会で自身の探究成果を発表していた。中高だけでなく、大学もつなぐ「縦の接続」を意識した取り組みであると言える。

以上の実践から、中高段階での探究が大学での学びに繋がるという点で、学校間の連携が非常に重要であることが分かる。

増見先生のご講演は、校種連携を意識した探究活動の重要性と教員たちが「探究」に対する姿勢について深く考えるきっかけとなった。生徒だけでなく、教員自身も授業づくりに対する「探究マインド」を

持ち続けることが大切である。自分自身も日々の授業づくりを通して、常にどうすれば良くなるか、今後も探究を続けていく必要があると改めて認識した。

また本講演を通じて、「増見先生のような探究活動を自分の授業でもやってみたい」と思った。私は現在、公立中学校で中学1年生の英語を指導しているが、探究的学びを実践するには、「生徒の英語力」と「探究プロセスの構築」の観点からまだ課題が多く、探究学習が十分にできていない状態にある。

しかし、日々の授業を工夫することで、探究学習を実践できる可能性があると感じた。今後はより幅広い分野の題材を用いて生徒が日々の英語授業で探究学習に必要な知識を身につけ、それらを授業の中で積極的に使えるような英語授業を目指す。そして、発問や音読活動を工夫しながら生徒の基礎力を育成し、プレゼンテーションやパフォーマンス課題を積極的に取り入れてより深い理解できる探究的な学びの授業を実践していく。

報告者：眞下 輝彦（尼崎市立小園中学校）

講演2

「中高6年間を見据えた学校英語教育への提言」

講師：臼倉 美里先生

（東京学芸大学）

本講演は、「中学英語の基礎基本は本当に身につけているのか」という問いを出発点とし、日本人高校生が実際にどの程度中学英語を使いこなせているのかを実証的に検討したものであり、高校英語教育の前提そのものを再考させる内容であった。

多くの中学英語で学ばれた知識が、高校生の段階において言語習得過程におけるインテイク (Intake) 段階にすら到達していない実態が指摘された。高校での英語学習においてこのような状況と直面する要因としては、高校英語教科書の分量や一文の長さ・複雑さ、学校や教師側に明確な英語授業モデルが存在しないこと、そして中学英語が十分に定着しないまま高校に進学している現状が挙げられた。

こうした問題意識のもと、「日本人高校生はどのくらい中学英語を使いこなせるのか」という問いに答えるため、複数の高校において、高校1年生を中心に3学年で延べ5000人を超える生徒を対象とした中学英語定着テストが実施された。リーディング、

リスニング、ディクテーション、和文英訳、絵描写といった多面的な課題を通して、中学英語がどの程度運用可能な形で身につけているのかが検討された。

結果の一例として示されたリーディングでは、日本人高校生の平均読解速度が1分間あたり73語であったのに対し、英語母語話者が読解を目的として読む場合には1分間に300語以上とされていることが紹介された。この差を踏まえ、現在の日本人高校生の状態を果たして「英文を読んでいる」と言えるのかという問いが投げかけられた。また、ディクテーションでは18問中の平均正答数が5問にとどまり、文構造の複雑さ以上に、文の長さや情報量の多さが学習者にとって大きな負荷となっている可能性が示唆された。

さらに、中学英語の定着と大学入試、特に共通テストとの関係性についても検討がなされ、中学英語が定着していることが大学入試を突破するうえでも重要であることが示唆された。中学英語の運用力は、決して入試と切り離されたものではないという点が、データを通して示された点は印象的であった。

こうした現状を踏まえ、具体的な実践例も紹介された。青森県立田名部高校におけるTANABU Modelでは、英語コミュニケーションの各レッスンにかかる時間に軽重をつけ、場合によっては1レッスンに15時間を割きながら、インタビューロールプレイなどを通して学習した英語をインテイクの段階へと導く実践が行われていた。教科書本文を

簡単に書き下したEasy Summaryを学習に使う青森県立三本木高校の「三本木メソッド」や、学年をまたいで同一の教科書、レッスン内容を復習・発展させながらアウトプット活動を実践する山形県立鶴岡中央高校の「山形スピークアウト方式」などの実践も紹介された。共通して重視されたのは、知識としての英語にとどまらず、音読やリテリングが十分にできる段階、さらにはアウトプットできる段階まで到達することを目標とし、新しい内容へ進む前に中学英語という「足元」を丁寧に確認する姿勢であった。

質疑応答においても、高校段階で中学英語をきちんと使える土台を作る必要性が改めて強調された。一方で、中学校においてすべての学習項目をインテイクやアウトプットの段階まで到達させるだけの物理的時間が不足しているという現実も共有された。そのうえで、高校では中学英語がすべて定着しているわけではないという前提に立ち、補完・強化を行う必要があるという整理が示された。

中学英語の習得を中学校での指導だけで完結させるという考えには、私自身以前から疑問を抱いていたが、本講演を通してその認識が裏付けられたと感じた。中高連携という言葉は頻繁に用いられるが、物理的・制度的な連携にとどまらず、互いの不足を理解し補い合うことこそが真の連携なのではないのだろうか。その一端を担う教師としての責任を改めて自覚させられるご講演であった。

報告者：与那嶺 裕紀（近畿大学・摂南大学）

学会事務局からのお知らせ

◆会費納入のお願い

本年度の会費の納入がまだの方は、急ぎお振込みをお願い致します。お振込先は、以下のウェブサイトでご確認いただけますよう、お願い致します。

全国英語教育学会第51回岡山研究大会（2026年8月22日・23日（土・日）開催）での発表資格は、2026年2月末日までに会費を納入された会員のみとなっておりますので、ご注意ください。

<http://www.keles.jp/join/>

◆メールアドレスご確認のお願い

昨年度からNewsletterの郵送での配布を止め、KELESウェブサイトへの掲載と会員の皆様への一斉メール配信としております。また、下記フォームにて、メールアドレスの登録・更新をよろしくお願いいたします。

<https://forms.gle/deRoVkjPDa9iMKkr6>